

# 国際開発分野におけるEBPM の現状

佐々木 亮  
国際開発センター  
sasaki.ryo@idcj.or.jp

1

## EBPMの普及と本研究の比較分析の対象

- 国際開発分野におけるEBPMの実践として、インパクト評価が広く普及している。そこで使われているデザインはRCTである。

|                |   |
|----------------|---|
| 新興の3つの非営利の研究機関 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 貧困アクションラボ (J-PAL : The Abdul Latif Jameel Poverty Action Lab)</li> <li>・ IPA (Innovations for Poverty Action)</li> <li>・ 3ie (International Initiative for Impact Evaluation)</li> </ul> |
| 伝統的な援助機関       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 世界銀行 (World Bank)</li> <li>・ アメリカ国際開発庁 (USAID)</li> <li>・ イギリス国際開発局 (DFID)</li> <li>・ 日本の国際協力機構 (JICA)</li> </ul>  |

2

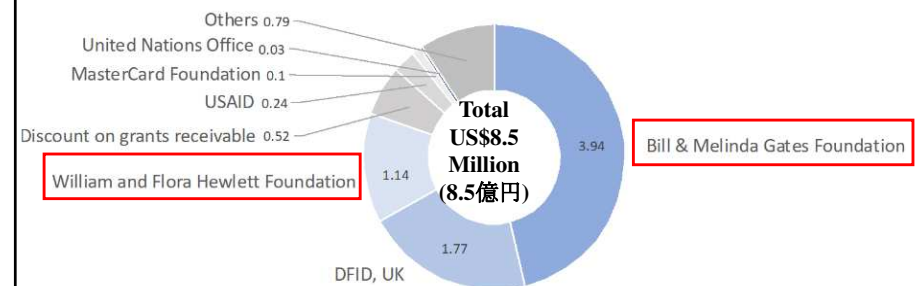
表1 国際開発におけるエビデンスの波 (第0～第4の波)

| 波の段階 | 年代               | 説明   |
|------|------------------|--|
| 第0の波 | 1969-1980年代      | RCTの国際開発分野への紹介と、科学的評価対実践的評価の論争(Campbell, D.T. 1969)。                   |
| 第1の波 | 1990年代           | New Public Management (NPM)の影響によるアウトカム重視の考え方の定着。                       |
| 第2の波 | 2000年代           | RCTを適用したインパクト評価の実施機関の設立とエビデンスの蓄積の時代。貧困アクションラボとIPAの設立。                  |
| 第3の波 | 2000年代末-2010年代中期 | 3ieの設立によるメタアナリシス(Meta-Analysis)とセクター別レビューの増加の時代。RCTを適用したインパクト評価の継続的増加。 |
| 第4の波 | 2010年代後期         | 「エビデンスの洪水」と「エビデンスから政策への反映」の試行錯誤の時代。                                    |

(出所) White, H. & Masset, E. (2018). 第0の波を筆者が追加したほか、一部区分を変更している。

3

図3 新興の研究機関のファイナンスの例：  
3ieのAnnual Income



4

## 今後の課題

- (1) 「**実験する社会**」(Campbell, D.T. 1969)  
が、50年の時を経て実現に向かう
- (2) 「**プロジェクト・アイランド**」と  
インパクト評価の対象レベル
- (3) 業績測定 (PM)と評価 (Evaluation)の混同
- (4) **NGOsとの協働**による介入実施とデータ収集
- (5) **IT長者のバックアップ**によるEBPMの普及



(出所)  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Donald\\_T.\\_Campbell](https://en.wikipedia.org/wiki/Donald_T._Campbell)